

道元禪師の修道論

特に『正法眼蔵隨聞記』に見られる学道の用心について

角 田 泰 隆

はじめに

先に拙稿「道元禪師の大疑滞とその解決」(『道元禪師記念論集』所収、道元禪師七〇回大遠忌記念出版、平成十四年八月、大修館書店刊)において、筆者は、道元禪師の諸伝記に見られるいわゆる大疑滞を取り上げ、この疑問およびその解決が、その後の道元禪師の仏法に大きく関わっていくことを論じた。

「十八歳内 看聞一切経二返。学宗家之大事。法門之大綱。本来本法身。天然自性身。顯密両宗。不出此理。大有疑滞。如本自法身法性者。諸仏為甚麼更発心修行哉。」(『行状記』、河村孝道編著、諸本対校永平開山道元禪師行状建断記、昭和五〇年四月、大修館書店刊、一六一頁中段。)「十八歳内 看聞一切経一遍。宗家之大事。法門之大綱。本来本法性。天然自然身。顯密両宗。不出此理。大有疑滞。如本自法身法性者。諸仏為甚麼。更発心修行。」(『行業記』、同一五八頁中段)

すなわち、道元禪師が比叡山の修学中にしばしば耳にしたと思われる「本来本法性、天然自性身」なる教理に疑問を抱き、入宋中もこれと類似する考え方である「冷煖自知」、「痛痒了知」、「見聞覚知」といった身心の働きを絶対肯定する見解に接して、これらを批判し解決する中で、道元禪師の仏法の核心部分が確立されていったと考えられるのである。

『辨道話』に示される、

この法は、人人の分上にゆたかにそなはれりといへども、
いまだ修せざるにはあらはれず、證せざるにはつること
なし。(大久保道舟編『道元禪師全集』上巻、七二九頁、
次後同書からの引用は巻と頁数のみ)

は、この大疑滞に対する解決を最も端的に示したものであり、
『正法眼蔵』「即心是仏」において、「いはゆる即心の話をきき
て癡人おもはくは、衆生の慮知念覚の未発菩提心なるを、す
なはち仏とすとおもへり。これはかつて正師にあはざるに由

りてなり」（四三頁）と批判し、「しかあればすなはち、即心是仏とは、発心・修行・菩提・涅槃の諸仏なり。いまだ発心・修行・菩提・涅槃せざるは、即心是仏にあらず」（四五頁）と示すのも同様である。

道元禪師ほど、坐禅・食事・洗面・洗淨はじめ日常生活の威儀・作法を重視し、これらに厳格に従うべきことを強調した禅者はいない。それは、先の疑問とその解決と密接な関係をもつのであり、「冷煖自知」「痛痒了知」「見聞覚知」等の靈妙な身心の働き、「本来本法性、天然自然身」なる身心を煩惱の方向に向かわせるのではなく、仏の威儀作法を實踐する方向に向かわせようとしたものである。

「冷煖自知」「痛痒了知」「見聞覚知」等の能力の自覚は、まさに我々の身心が「本来本法性、天然自然身」なることに気付かせるものであるが、それがそのまま悟りであり、仏に成ることでない。「冷煖自知」「痛痒了知」「見聞覚知」等の働きは、私たちを凡夫とも作し、仏とも作すからである。それは、私たちの手が、他人を殴ることもすれば、他人を助け起こすこともすることからも知れよう。

道元禪師が、何故に坐禅・修道を専らにすべきことを勧め、その上、食事・洗面・洗淨等の威儀・作法の實踐を重んじたのか、それは私たちのこの身心を凡夫としてではなく仏として用いることの重要性を悟り、それこそが仏道であると確信

したからに他ならない。

本稿は、このことをさらに『正法眼藏隨聞記』に見られる道元禪師の言葉によって確認することを意図したものである。道元禪師が学道のあり方について、どのように弟子たちを指導していたのか、道元禪師の肉声を伝える『正法眼藏隨聞記』は重要な資料である。

『正法眼藏隨聞記』の成立について

本稿は、『正法眼藏隨聞記』の書誌的考察が主題ではないので、その成立については簡単に触れておくが、池田魯參編『正法眼藏隨聞記の研究』（一九八九年五月、北辰堂刊）等を参照し以下述べれば、『正法眼藏隨聞記』巻六末尾の跋語に、

先師永平并和尚在學地日、學道至要、隨聞記錄。所以謂隨聞。如雲門室中玄記、如永平寶慶記。今錄集六冊記者、入假名正法眼藏拾遺分内。六冊俱嘉禎年中記錄也。

先師永平并和尚、學地に在りし日、學道の至要聞くに隨つて記錄す。所以に隨聞と謂ふ。雲門室中の玄記のごとく、永平の寶慶記のごとし。今六冊を録し集めて巻を記し、假名正法眼藏拾遺分の内に入れり。六冊俱に嘉禎年中の記錄なり。（下巻、四九五頁）

とある。この跋語は長円寺本（愛知県長円寺藏、寛永二十一年一六四四八月書寫、六卷一冊本）や東本（東京都東隆

眞藏 書写年次不明、六卷一冊本）等に見られるもので、これによれば、懐装を「先師」と呼ぶ弟子の跋文であり、懐装にとつて、道元禪師の『宝慶記』と同様の性格をもつものであること。また、嘉禄年中（一一三五—一一三八）の記録であり、『正法眼蔵随聞記』という題目は後に名付けられたもので、原本には「随聞」と書かれていたか或いは何も題目はなかつたと思われ、この「随聞」が記録され六冊にまとめられて、仮名正法眼蔵の拾遺に収録され、『正法眼蔵随聞記』と案題されたものであることが知られる。

『正法眼蔵随聞記』の写本の主なものに、

大安寺本（長野県大安寺蔵、寛永十年 一六三三 二月

書写、零本 第三巻から第六巻）

長円寺本（愛知県長円寺蔵、寛永二年 一六四四 八月書写、六卷一冊本）

東本（東京都東隆眞藏、書写年次不明、六卷一冊本）

駒大本（東京都駒澤大学図書館蔵、明和八年 一七七

一 晩秋書写、六卷一冊本）

大昌寺本（長野県大昌寺蔵、寛政七年 一七九五 三月

書写、六卷三冊本）

があるが、と とでは巻序が異なっている。前者の巻序の一三四五六は、後者の六一二三四五に相応する。

さて、以下本論は、『正法眼蔵随聞記』の本文を引用するが、

長円寺本を底本とする大久保道舟編『道元禪師全集』下巻（四一九—四九五頁）により、その引用文の所在は巻数および分類された法語の算用数字で、例えば巻五の第十話は（五ノ一〇）と表示した。

『正法眼蔵随聞記』における学道の用心

『正法眼蔵随聞記』巻六の二に、

示云、學道の人は、吾我の爲に佛法を學することなかれ、只佛法の爲に佛法を學すべき也。その故實は、我身心を一物ものこさず放下して、佛法の大海に廻向すべき也。其後は、一切の是非を管すること無く、我心を存することなく、難成ことなりとも、佛法につかはれて強いて是をなし、我心になしたきことなりとも、佛法の道理になすべからざることならば、放下すべき也。六賢、佛道修行の功をもて、代りに善果を得んと思ふ事無れ。只一たび佛道に廻向しつる上は、二たび自己をかへりみず、佛法のおきてに任せて行じゆきて、私曲を存すること莫れ。先證皆如是。心にねがひてもとむる事無ければ、即ち大安樂なり。世間の人にまじはらず、己が家ばかりにて生長したる人は、心のままにふるまひ、おのが心を先きとして、人目を不知、人の心をかねざる人、必ずあしき也。學道の用心も如是。衆にまじはり、師に隨ひて、我

見を立てず、心をあらために行けば、たやすく道者となる也。學道は先づ須く貧を學すべし。猶ほ利をすて、一切へつらぶ事なく、萬事なげすつれば、必ずよき僧となる也。

とある。道元禪師が學道の用心を示した重要な説示であると考えられる。「ここには、「吾我を離れること」、「身心を放下すること」、「仏法に任せること」、「所得を得ようと思わないこと」、「私曲を存しないこと」、「我見を立てないこと」、「師に随つこと」、「貧であること」、「利（名利）を捨てること」などが説かれてゐる。

また、卷二の二には、

一日示云、人、其の家に生れ、其道に入らば、先づ其の家の業を修べし、知べき也。我が道に非ず、自が分に非ざらんことを知り修するは、即非也。今出家の人として、便佛家に入り、僧道に入らば、須く其業を習べし。其儀を守ると云ふは、我執を捨て、知識の に隨ふ也。其大意は、貪欲無也。貪欲無らんと思はば、先須離吾我也。吾我を離るるには、觀無常是れ第一の用心也。世人多、我は元來人に能と言れ思はれんと思ふ也。其が即よくも成得ぬ也。只我執を次第に捨て、知識の言隨ひゆけば、昇進する也。理を心得たる様に云へども、しかありと云へども、我は其の事が捨得ぬと云て、執し好み修するは、彌

沈淪する也。禪僧の能く成る第一の用心は、祇管打坐すべき也。利鈍賢愚を論ぜず、坐禪すれば自然に好くなるなり。

とある。これも出家者の學道の用心を示した重要な説示と考えられるが、「ここでは、「我執を捨てること」、「知識の教えに随つこと」、「貪欲なきこと」、「吾我を離れること」、「無常を觀すること」、「只管打坐すべきこと」等が説かれてゐる。無常を觀じ、吾我を離れ、貪欲から離れ、我執を捨てて知識の教えにしたがい、祇管打坐すべきことが、やや段階的に示されてゐる。

同様な説示は、卷四の三にもある。

此の故實は、まづ須棄世捨身也。我身をだにも眞實に捨離つれば、人に善く被思と云心は無き也。然ども又、人は何にも思はば思へとて、惡しき事を行じ、放逸ならんは、又背佛意。唯行好事、為人やすき事をなして、代を思に、我がよき名を留めんとと思、眞實無所得にて、利生の事をなす、即離吾我第一の用心也。欲存此心、先づ須念無常。一期は如夢、光陰易移、露の命待つがたうして、明るを知らぬならひなれば、唯暫くも存したる程、柳の事につけても、人の爲によく、佛意に順はんと思べき也。

「こゝでも、「無常を念うこと」、「それによつて、「吾我を離れること」、「そして、「無所得」にて、「利生の事をなすこと」が説

かれています。

道元禪師が示される学道の用心として、これらの説示に示される用心は、『正法眼蔵隨闡記』の他の法語にも実に頻繁に見出される。次に、これらを整理してみる。

ア、吾我を離れること

仏道においては吾我を離れるべきことについては、一、四三、六一、六一二、六一二等に見られる。同様な言葉として「己見を離れる」(一六一)、「我見を離れる」(五三)等もある。吾我を離れることは「名利を捨てる」(六一)と「ことと共に説かれる場合があり」(所謂出家と云は、先ず吾我・名利をはなるべき也)「六一四」、「我執を捨て、知識の教に随ふ也」(一一)等の説示もある。また、吾我の為に仏道を学ぶのではなく、「佛法の為に佛法を学ぶべきなり」(六一二)とする。また、「己見を離れて、師の言葉を聞くべきである」と示される。

この吾我を離れることは、「私を無くす」(六一六)という「こと」でもある。これに関連して「私曲を存すべからず」(一一〇、五一五、六一二)、「私を存する事なかれ」(六一四)、「私を用いず」(一一〇)等の説示が見られる。

* 曰「己の智慧を捨てる」「己見を捨てる」(一一一五)

* 名聞・我執を捨てる 求めに応じて書状を「える」(一一二四)

* 古見を離れる 本執をあらためる(五七)

* 我執を離れる(六一二)

イ、身心を放下すること

吾我を離れるということとは、身心を放下するということでもある。身心を放下するとは、「真実の得道と云も、従来の身心を放下して、只直下に他に随ひ行けば、即ち実の道人にてある也」(一一六)等とあるように、他(師・善知識)に随うということであり、仏法の世界にわが身を投げ入れて、その教えに随って行くことを示している。

* 身心を放下する 師に随う(一一六、四一)

* 命を軽くして、衆生を憐れみ、身を仏制に任せよ。(一一一四)

* 身命を仏法の為めに捨てる心を発す。(一一二二)

* 此身を執すべからず。(一一三)

* 身心を俱に放下して、三寶の海に廻向して、佛法の教へに任せて、私曲を存することなかれ(六一)

* 我身心を「物もの」にさす放下して、佛法の大海に回向すべき也(六一二)

二) 只須く身心を放下して、佛法の中に他に随うて、舊見なければ、即ち直下に承当するなり(六一二)

* 身命をかえりみなし。(一一一)

* 命を惜しむことなかれ、命を惜しまざることをなかれ。(一一七)

- * 「仏法の為には身命ををしむ事なかれ」(六一)
- * 「身心を佛法に放下しつれば、くるしく愁ふれども、佛法にしたがつて行じゆく也」(六一二)

ウ、仏法に任せること

身心を放下するといふことは、仏法の教えに随うといふことであり、仏法の師(善知識)に随うといふことである。『正法眼蔵隨聞記』の中には、「この「仏法に任せる」という説示が、その全体にわたり、学道の用心として最も多く見出される。

- * 如来の風儀を慎う。(一一〇)
- * 仏法の為に諸事を行する。他に所得があるようにと思つてはいけな
い。(一一二)
- * 仏制を守る。只だ仏道を思う。(一一七)
- * 仏祖の風流を学ぶ・仏教に随う・仏制に順う。(一一九)
- * 仏法に随い、祖道に順う。(三二五)
- * 仏法に順う。人情を捨てるといふのは、仏法に随つて行するといふこと(三二六)
- * 仏祖の言語行履に順つて行く。仏教に順つて行く。(三二六)
- * 仏法のおきてに任せて行する。(三二六)
- * 「仏制を守り、戒律儀をも存じ、自行化他、仏制に任て行する。」(三二六)

- * 仏法に順じたらば作し、仏法でなければ行じないで過す。(三一八)

- ハ)
 - * 只だ仏祖の行履、菩薩の慈行を学行する。(三一八)
 - * 仏制に任せて行する。(三一八)
 - * 一向に仏法によりて行すべき。(三一八)
 - * 仏制を心に存す。(三一八)
 - * 仏祖の行履の外は皆な無用。(三一三)
 - * 先規を思い、先達にしたがい修行する。(三一三〇)
 - * 仏意に順う。(三一三)
 - * 仏祖の行履を守る。(四七)
 - * 祖道に随う。(四九)
 - * 僧の威儀を守る。(四一〇)
 - * 仏道に依行する。(四一三)
 - * 仏祖の行履、聖教の道理に依行する。(四一三)
 - * 「仏法のおきてに任じゆきて、私曲を存すること莫れ」(六一)
 - * 「学人仏祖の道を得んと思はば、すべからく祖道を好むべし。」(六一五)
 - 五)
 - * 「我心にたがへども、師の言は、聖教のことばならば、暫く其に随つて、本の我見をすて改めゆく、此の心、学道の故実也」(六一六)
 - * 佛祖の行履に任せる。(一一三)
- また、わが身を仏法に任せることは、決して容易なことではなく、強いて好み学すことが説かれ、

* 道を好む。(一四)

* 強いて道を好み学す。(一六)

* 強いて学道する。(五 六)

また、専ら仏法に随つべきであり、世を捨て、世俗に随つてはならないことも強調されている。

* 世俗に従わぬ。(三二九)

* 世を捨てる。(四二)

* 「只すべからく仏道を学すべし、世情に随つこと無れ」(六一)

* 「世情のを見をすべて忘て、只道理に任て学道すべきなり」(六一)

工、善知識に随つこと

仏法に任せるということとは、善知識に随つてということ、よき指導者に就いて修行することでもあるが、このことはまた同時に「衆とともに修行すること」(六一、六二、六三)、「教行によること」(一一五)、「知識の言葉に随つこと」(一一五)、「先人の言葉を尋ねること」(五一)、「良き人の久しく語るを聞く」(六一八)等と共に説かれている。

才、戒行を守り、威儀を調えること

仏法に任せるということは、また仏戒を守り、仏法の威儀を調えるということである。持戒の大切さは、一三三、二二

一、三三〇、四九等に説かれている。そしてまた、随処に、先ず身を調えることの重要性が強調される。「身をよく保てば心も随つてよくなる」(一三三、一六)、「身儀を修める」(一一三)、「律儀の戒行を守る」(一六)ことや、また叢林に入ることも大切さも説かれる(一八)。

おわりに

その他、『正法眼蔵随聞記』には、「貧」なるべきことを説き、「觀無常」の大切さを示し、当然のことながら学道における第一の修行が「祇管打坐」にあることが随処に説かれている。「こゝでは、それらについては省いたが(次頁)、『正法眼蔵随聞記』の説示の要旨」を参照されたい。道元禅師が比叡山において疑問をもち、入宋して如浄のもとに参じてその疑問を解決し、「本来本法性、天然自然身」なる身心を煩惱の方向に向かわせるのではなく、仏の威儀作法を実践する方向に向かわせようとした、その仏法の特徴が、懐装はじめ弟子達に親しく説かれた説法の記録である『正法眼蔵随聞記』の中に、特徴的に見出されることが知られるのである。即ち、吾我を離れ、身心を放下して、仏法に任せ、善知識に随つて、戒行を守り、威儀を調え、仏法を行すること、それこそが、道元禅師の大疑団の解決であり、自ら伝えた正伝の仏法の実践であつたと言えるのである。

『正法眼藏随聞記』の説示の要旨

卷一

- (一) 「はずべくんば明眼の人をはずへし」。道元禅師が天童山において、如浄禅師の侍者に請われて固辞した話。
- (一) 病者であるとか非器であるとか言っていてはいけな。身命をかえりみず発心修行することが学道の最要。
- (一) 衣食を貪ってはいけな。身体をよく保てば心も随つてよくなる。戒を守り仏祖の行履に任せて身儀を修めれば、心も随つて整えられる。
- 何かものを言う時は、三度顧みて、よくよく考えて発言するべきである。
- (一) 衣食に勞してはいけな。「貧」が大切。
- (一) 聞くべし、見るべし。聞くよりは見なさい、見るよりは得なさい。
- (一) 身の威儀を改めれば、心も随つて転ずる。強いて道を行する。衆に随つて行道する。善知識に随つて衆と共に行持て私なければ、自然に道人である。仏道は無窮である、悟つても修行を止めてはならない。
- (一) いずれ修行しようと思つてはいけな。居処や衣食を整えてから修行しようと思つてはいけな。また、仏道では命を惜しんではいけなし、惜しまないのもいけなし。
- (一) 「海中に竜門と云處あり」。叢林に入れば必ず仏となり祖となる。道を得ることは、能力の有る無しによらない、志があるか無いかによる。

(一) 恵心僧都、鹿を打ち追わせる。仏道修行者の行いには、善行・悪行ともに皆な思惑がある。

(一) 仏教を問う者には、質問者が理解しようとしまいと、真実の教えを説くこと。

禅僧は如来の風儀を懐うべきである。一切私の考えを用いてはいけな。

(一) まずは自己を捨て、相手の言うことをよく聞き、後で静かに考えて、批判したり随つたりする。

(一) 禅僧には衣鉢の外の物は無用である。また、万事を捨てて専ら一事をたしなむべきである。

(一) 教えを聞く時は繰り返し聞き、明確に納得する。師も弟子に対して何度も、分かつたかどうか尋ね、言い聞かせるべきである。

(一) 仏道修行者の用心は、常人と異なつて深い考えがあることがある。(栄西が、檀那が布施した絹を俗人に与えた話)

(一) 仏祖も本もと凡夫であった。知識に従い、教行によれば、皆な仏祖となるのである。今の人も自分を卑下せず、今生に発心すべきである。

(一) 真実の得道とは、従来の身心を放下して、ただ他(師)に従つことで、そうすれば、そのまま仏道の人である。

卷二

(一) 仏像舍利を礼拝供養すれば悟りが得られると思ひ込むのは間違ひ。仏子は仏教に順う。直ちに仏位に到る為には、ただ教えに随つて工夫弁道すべきである。戒行持斎は、ただ禅僧の行履、仏祖の家風であるから従つていくのである。真

の得道の為には只だ坐禅すること。学人は最も百丈の清規を守るべきである。それは護戒や坐禅等である。坐禅の時、何の戒を持たないことがあろう、何の功德が来ないことがあろう。ただ衆に従って、古人の行履に任せて行じてゆくべきである。

(一) 出家の人として仏家に入り、僧道に入ったなら、必ずその業を学ぶべきである。それは、我執を捨て、知識の教えに随うこと。無常を觀じ、吾我を離れ、貪欲を離れることが大切である。我執を次第に捨て、知識の言葉に随い、只管打坐すれば、自然に好くなつてゆく。

(二) 仏学博覧は叶わない。一つの行を専ら勵んで、師匠面、先輩面しないことである。

(一) 南泉普願の斬猫の話。

(二) 犯戒は受後の所犯をいう。

(一) 受戒と誦戒とは別である。

(二) 逆罪も懺悔すべきであり、受戒の者は、懺悔すれば清浄となる。未受戒の者と同じではない。

(一) 逆罪であっても懺悔して受戒しようとしたならば授けらるべきである。たとえ自身は破戒の罪を受けようとも他の為に授戒するべきである。

(二) 悪口をもって僧を呵責してはいけない。四人以上集まれば僧の体であつて國の宝である。(先師如浄の天童山での接化の様子)。他の非を見たら、慈悲心をもって教える。

(二) その立場にない人が、人を叱つてはいけない。

(二) 仏道に入ったならば、仏法の為めに諸事を行つて、そ

の代償を得ようと思つてはならない。

(一) 自分が正しいと思つても、相手を言い負かしてはいけない。口論は、なんとなく止めるのがよい。

(二) 無常迅速、生死事大であるから、ただ仏道を行じ、佛法を学び、多般を兼ね学ぶべきではない。文筆詩歌等の学も捨てるべきであり、仏祖の言語すら多般を好まないようがい。

(一) 仏道に生きる者(発菩提心の者)は命を軽くし、衆生を憐れむ心を持って、身を仏制に任せようと思つ心を発すべきである。またこのような志が少しでも有れば失わないようにしなければならぬ。

(二) 自分の考えを師の言葉に従い段々と改めていくこと。

(一) 学道の人は一事を専らにすべきである。その専らにするところは坐禅である。

(二) 学道の人、心を調え静めて、仏道の道理になつているかどうかを考え、道理になつていなければ発言し行動すべきである。

(一) 学道の人、衣食に執着してはいけない。仏制を守り、心を俗事に向けてはいけない。

(二) 禅僧の行いは、仏祖の風流を学ぶべきである。心、世の中の向けず一向に仏道を学ぶ。仏教(仏制)に随順すべきである。

(一) 強いて道心をおこし、仏法を行すべきである。はじめから道心有るものはいない。発し難い道心を発し、行い難い仏道を行すれば自然に増進する。

- (一) 酒に酔い猥談をするなどは乱れた僧の行ないである。無益の言説は正しい仏道の妨げになる。
- (二) 人に知られないところで善事を行い、悪事を行ったならば明らかにして反省しなさい。
- (三) 僧であるならば徳があるかないかに関わらず、等しく供養すべきである。末世の僧侶は外見は尋常に見えても悪い心もあり悪い事もする。良い僧・悪い僧と差別するのではなく、仏弟子という点を尊敬し信頼すべきである。
- (四) 在家人の所望に応じること。自らのことを考えず、世間の評判を気にせず、名聞を捨てて、その人の利益をはかってあげること大切。
- (五) 内心と外面の行動が一致するように過ちは悔い改め、徳は内に隠し、外面は飾らず、良い事は他人に譲り、悪い事は自分が引き受けるように努めるべきこと。無常迅速、明日を思わず、今日だけと思って仏道に従ってゆく。時に臨み、事に触れて、仏法が盛んになるように、衆生の利益となるように、物事を配慮する。全て事に当たって道理をよく考えなければならぬ。
- (六) 仏教に順って乞食を行することは良いことであるが、風土・世情に順って、時に臨み事に触れて道理を考えて計らうべきである。
- (七) 学道の人は世・家・身・心を捨てなければならぬ。
- 卷三
- (一) 修行者は先ず心を調えること。心を調伏したならば、自身の体も世間も捨てることは容易である。悪い心を忘れ、我が身を忘れて、ただひたすらに仏法のためにすべきである。悪いことを避け、善いことをするよう心掛けることがそのまま身心を捨てることである。
- (二) 宋西禅師、真人に仏像の光背の材料を与える話。仏は求められれば手足を切って衆生に施されるに違いないのであるから、御仏の心になうよう飢えている衆生は助けなければならぬ。
- (三) 寺院（建物）の将来の亡失を心配するより、今の修行が大切。
- (四) 道心が有って、愚かな者に批判されるのはさしつかえない。道心がないのに、道心のあついなと思われることがあれば、気を付けなければならぬ。
- (五) 人知れず仏道にかなった行いをしていくと、自然と仏道の徳が外にあらわれてくるが、そのことをも期待せず、ただひたすら仏祖の道に順っていると、人々はその徳に帰依するのである。
- (六) 学道の人は、人情・世情を捨てるべきである。人情・世情を捨てるということは、仏の教えに順って行じることである。善し悪しを自分で判断せず、ひたすら仏祖の言行に順ってゆくことが大切である。
- (七) 学問をする時は、儒学者がさうであるように身を忘れて学問するほどでなければならぬ。
- (八) 公胤僧正の語。「道心とは一念三千の法門等の教えを学び保っていること。外形だけ笠を首に懸けて僧の格好をして彷徨い歩いているのは天狗魔の行である。」

(三) 宋西僧正の語。「皆なが用いている衣食は私が与えているのではない。諸天が供養してくれたものである。人間には生まれつき具わっている衣食の分け前がある。走り回って求めてはいけない。」

(三) 宏智禅師の教訓。「多く修行者が集まって資材が不足しても心配することはない。」人には皆な生まれながら持っている衣食の量がある、与えられた寿命がある。修行者は、他のことに心を留めず、一向に修行すべきである。

(三) たとえ千人万人が集まろうと、利益にとらわれ財欲にふける者の集まりなら、真実の道を学ぶ者が一人もいないのにも及ばない。清貧艱難で学道している人の所に一人でもやって来て学ぼうとする者がいれば、それこそ仏法の興隆である。

(三) 造像・起塔等のことがそのまま仏法の興隆ではない。粗末な庵や樹の下で仏の教えの一句でも思い、一時でも坐禅をすれば、それこそ真の仏法興隆である。

(三) 仏法興隆のために関東に下向するべきである、と勧める者がいるが、もし志があればやって来て学ぶべきである。志がないものには、こちらから出向いていっても聞き入れてくれないだろう。

(三) 学道の者は学問僧の書籍や仏教以外の典籍などを学ぶべきではない。祖師たちの然るべき語録などを見るのがよい。文筆を調えることを好むべきではない。

(三) 「なにの用ぞ」の話。語録や公案等を見て、古人の行履を知ったり、人にそれを説き明かしたりすることは、自分

の修行としても、他人を導くためにも無用である。只管打坐して大事を明らめ、心を明めれば、その後は一字を知らなくとも他に開示するのに用い尽くすことがない。(宋国の僧に語録を読む目的を問われて考え、それ以後は語録は見ず、坐禅に励み一生参学の大事を明らかにできたこと。)

(三) 内徳がないのに、人に買ばれてはいけない。うわべだけ世捨て人のようであっても(この世に執着しないような振る舞いをしていても)真実の道心者ではないことがある。表面はただなんということもなく世間の人と同じようにして、それでいて仏制や戒律を守り、内心を調べてゆくのが真実の道心者である。

(三) 学道の人は、世間の人に知者(もの知り)と思われるのは無用のことである。自分が知っている仏祖の法を説くことは大切であるが、そのほかは教家の教えや世俗の諸学を学ぶことは必要ない。かえって仏道の妨げとなる。法語等を書く場合の対句や韻や平仄等も知らない方がよい。また、もとは教家の知識があったとしても、みな忘れてしまふのがよい。今から学問することなど決してすべきではない。宗門の語録など、真実の参学は見るべきではない。

(三) 世間の人の目を気にするのではなく、仏道にかなっていたら為し、仏法ではないと思つたらしてはいけない。諸天善神が目に見えないところで見えおられることを思い、仏制に任せて行じてゆくべきである。

(三) 人の見ていないところでも、内外なく、明暗なく、仏制を心に存して、悪事を行つてはならない。

- (二) 道を得るためには博識も学才も必要ではない。真実の学道はやさしいはずである。道を得る秘訣は、志がしつかりときまり、全力をあげて参学することである。志を起こしたらひたすら世間の無常を思うべきである。時をむなしく過こさず学道に専心すべきである。
- (三) 多くの人が世間を捨てないのは、自身をほんとうに思っていないからであり、優れた指導者に出会わないことによるのである。真の仏法者となり仏祖となれば、これ以上の名利はない。
- (三) 「朝に道を聞かば夕に死すとも可なり」。わずかな時間でも仏法のために身を捨てたならば、未来永遠の安樂のもととなる。修行すべき道を修行せず、むなしく日夜を過こすことは口惜しいことである。
- (三) 仏道を学ぶ者は、人間は必ず死ぬものであることを考えなければならぬ。全てのことになんたう、仏祖の行いの他は無用だと心得よ。
- (三) 衣についても、古い物を惜しみ、新しい物を貪る、両方の心を離れることが大切である。ただ、破れた袈裟は續り合わせて長く使用し、新しい袈裟をむやみと欲しがらぬようにするのがよい。
- (三) 父母に対する報恩等のこと。出家者は恩愛の世界を捨て無為の世界に生きるべきである。
- (三) 鈍根というのは、志の到らない時のことをいっているのである。今夜にも死ぬかも知れないと思って、専心に励み、志を強くして行えば、悟りが得られないことはない。死なないう前
- に悟りを得ようと切に考え、仏法を学ぶならば、悟りは得られる。
- (三) 食物の味を思い、食物の善し悪しを選び好みしてはいけない。修行僧は施主の信心による施物、寺の経営による清浄な食物によって飢えを防ぎ、命を支えて仏道を行ずるだけである。
- (三) 仏法を外に向かつて求めてはいけないということについて。坐禅はそのまま仏行である。坐禅は不為であり、自己の正体そのものである。このほかに仏法として求めるべきものはない。
- (三) 近代の僧侶が、世俗に従うべきであるといっているが、そつではない。仏法は悉く世俗と違背している。僧侶は一切世俗に背くべきである。
- (三) 禪の修行者は仏のころろにかなうようにと修行しなければならぬ。自分勝手な考えを止め、仏の定めたきまりに随順していくべきである。
- 私が天童寺で修行していた時の、如浄禪師の坐禅修行、学人接化の様子。
- (三) 道を得ることは、まさしく身をもって得る。仏法正伝の宗門では、身心ともに道を得る。しかし、心を放下し、ひたすら坐禅するならば、道というものが判る。道を得るのは身体でもって得るのである。そのために坐禅をしなければならぬ。
- 巻四
- (四) 学道の人、身も心もなげすて、仏の教えの中に投

げ入れること。

(四) 在家と出家では心構えが違っていないなければならない。出家者は迷いを離れなければならない。生死事大、無常迅速である、気をゆるしてはならない。

(四) 無所得で善行を行うこと。そのためには世を捨て、自分自身を捨てることが第一の心掛けである。この心を持つには無常を観ることが大切である。この世に生きている間に、少しでも人のためになることをして、み仏の心に従うようにと思ふべきである。

(四) 学道の人は貧しくあらねばならない。貧しくて、欲張らなければ、決して怒る事もなく、恥辱を受けることもなく、安楽で自由である。仏法に順う者は、袈裟と応量器以外は持つてはいけない。他人に隠さねばならないようなものを持つてはならない。持たない方が安楽である。

(四) 昇進を求めて、衆僧の首位となり、長老となるうなどと望むことを古人は恥すべき事としていた。修行の道にある者は道を悟ろうとすることだけを考えて、そのほかの事を考えてはならない。

(四) 仏弟子は、釈尊の家風を受け継ぎ、一切衆生を一子のように憐れまなくてはならない。自分の侍者や従者であっても、大声で叱り責めたり困らせたり、傷つけたりはならない。おだやかな言葉でも従う者は従う。仏弟子は、荒々しい言葉で、人を憎み叱りつけてはならない。

(四) 禅僧が心掛けることは、仏祖の行いをそのままに守ることである。そして財宝を蓄えてはいけない。禅僧が他宗か

ら蓄められるのは、財宝を持たず貧しいからである。

(四) 人の良いところを見て認めてあげること。また、欠点をあげつらってはならないこと。

(四) 人は必ず陰徳を修めなくてはならない。破戒僧のように見えても、粗末な仏像でも、粗末な経巻でも、(仏・法・僧の)三宝を信じ敬わねばならない。

「丹霞天然、木仏を焚く」。悪事だと思われるが、これも説法施設。その行状は立派であった。道を得た祖師方は戒行を守り、威儀が調っていた。

(四) 仏祖を行じようと思つたら、所得や利益を求めることなく、先聖や祖祖の道を行すべきである。

(四) 道を学ぶ者は先ず「貧」であること、財宝をもたないことが大切である。廬居士は、財宝を全て海に投げ捨てて禅人となった。

(四) 人間には皆な生まれながらの生活に必要な(衣食等の)分量が具わっているのので、これらを求めることなく一向に修行すべきである。

(四) 世の中の人が非難する事でも、仏の教えの道理であるならばこれに従うべきである。また、世人がこそつて蓄めても、仏の教えの道理に適っていないければ行ってはいけない。世の人情に従ってはいけない。仏道に従って行すべき道理があれば、ひたすらそれを行うべきである。

(四) 六祖、母を辞して五祖に参す。親の恩に報いるためには俗世を捨て仏道に入ることがよい。

巻五

- (五) 学道の人は自分の見解に固執してはいけない。
- (五) 南陽慧忠の話。古人の言葉をそのまま用いるのではなく、真の道理を知るべきであり、尋ねるべきである。
- (五) 仏道を学ぶ者が第一に心掛けることは、我見を離れることである。我見を離れるということは、この身に執着してはいけないということである。この身は十八界の聚散に過ぎない。
- (五) 「霧の中を行けば覚えざるに衣しめる」。立派な人に親近していると、知らない間に、立派な人となる。坐禅も長い間行っていると、忽然として大事を明らかめ、坐禅が仏道修行の正門であることが判るときがある。
- (五) 「懐柴を興聖寺の首座に請す」。修行僧が少なくとも、仏祖の道をひたすら行っていることを、禅道場の盛んなさまと言う。道を行する力は衆力をもつてする。玉は琢磨によって器となる。光陰を虚しくわかつてはならない。
- (五) 「古人も皆金骨にあらず」。悪く劣っている人間であっても、発心修行すれば得道できる。苦しく辛くとも、強いて道を学ぶべきである。
- (五) 悟りが得られないのは古見を持ち続けるからである。固執した思いを改めていけば、真に道を得ることができる。
- (五) 学人、初心の時、道心のあるなしに関わらず、経論や聖教等をよくよく学ぶこと。名利の念を捨てる。
- (五) 出家する以前の身分を口に出すようでは、道心があるとは言えない。また、親しい関係であっても道心がない者に

は道心を起こすよう言っておけるべきである。

- (五) 「三覆して後に云え」。行動を起こす前に何度も考え、仏道の為には有益であり、道理にかなっているならば発言・行動すること。
- (五) 善悪は定めがたい。世間では綾羅錦繡を着るのをよしとし、糞掃を悪しというが、仏法では逆である。一切のことにわたって善悪は定めがたい。事細かに分別し、真実の善を行い、真実の悪を捨てるべきである。人の欲を起させないようなものを、善し、清しとする。
- (五) 正像末は方便、教えに順って修行するならば、誰でも道を得られる。今日ただ今だけと思って仏道に順ってゆくべきである。
- (五) 出家人は、師のもとで一つに和合して、心と威儀を同じくして修行すべきである。
- (五) 楊岐方会、竜牙居遁の話。真実に仏道を学んだ人は、一人として財宝豊かな者はいなかった。道を学ぶには、是非とも貧しくあるべきである。
- (五) 仏門に入るに当たり、前もって生活のための物資を準備し、考えておく必要はない。私が何も支度しないのも自分勝手にやっているのではない。祖師方が行ってきた方法に従って行っているのである。
- (五) 出家人は財宝は持たず、智慧と功德を宝とする。他人の過ちを乱暴な言葉で叱ってはならない。

巻六

- (六) 仏法の為に身命を惜しんではいけない。慈悲・智慧が

ない人でも修行すれば身につけることができる。三宝に身を捧げ、教えのままに行じ、自分勝手な考えをもってはならない。智慧があり聡明な人でも、道心なく、吾我を離れず、名譽・利益を求める心を捨てられない者は、道者ともなれず、道理を知ること出来ない。

(六) 自分のために仏法を学んではいけない。仏法のために仏法を学ばなければならない。そのためには自分の身心を捨てなければならぬ。そして仏道の道理に照らして、為すべからざることは捨て去らなければならない。心に願ひ求めることがなければ、まことに大安楽である。修行者は仲間と生活し、師の教えに従い、自分の心を改めるよう心掛けること。道を学ぶには、貧を学ぶこと。

(六) 俗人が言っている、財産はその身を損するということ。

(六) 僧侶は私心を持つてはならない。道を志すならば、修行者としての名をあらわさぬようにするべきである。

(六) 仏祖の道を得ようと思うならば、仏祖の道を好むこと。

(六) 国王が忠臣を召しかえされた話。直言する忠臣こそ大切にすべきである。

(六) 禅僧は教化にあたり、悪いことをせず、善いことをするよう、たくみに手段をめくらすべきである。

(六) 「智者の無道心と、無智の有道心と」。智慧ある人は無道心であっても、ついに道心をおこすものである。道心の有る無しを問題とせず、仏道を学ぶことに努めるべきである。

また、貧しく財宝を持たないのがよい。

(六) 布施を受け悦んではならない。また、辞退してもいけない。布施は三宝に供養されるものであり、自分に供養されたものではない。

(六) 学人は知識・才能が他よりも優れていると思つても、他の人と論争をしてはいけない。また口ぎたなく人をののしったり、怒った目つきで人を見てはいけない。学人は時を惜しんで学ぶこと。論争している暇はない。論争は自分にも他人にとつても役に立たない。しかし、ほんとうに仏道を学ぼうとする人が法を問うことがあつたら、惜しんではいけない。

(六) 「光陰虚しく度ることなかれ」。学道の人はず暇を惜しむこと。ひたすら仏道を学び、いずれ後にと考えてはならない。

(六) 「学道はすべからく吾我をはなるべし」。自己への執着を離れ、決して自分のために仏法を学んではならない。世間の分別を忘れ、ひたすら仏法を学ぶこと。

(六) 只管打坐。ひたすら坐禅すること。人と交わつて物語などしない。常に独坐を好むこと。

(六) 仏法では、ものに軽い・重いの区別はない。貴重なものに執着する心も、逆に軽小なものを愛着する心も、そのことが同じである。

(六) 先師明全和尚が入宋しようとした時の話。利他の行も自行の道も、劣なるをすてて、すぐれたるを取るのが菩薩の善行である。

（六）自分の考えとは違っていて、師の言葉・聖教の言葉であるならば、しばらくそれに従い、自分の考えを捨てて改めていくことが大切である。

（六）人の心に元來善悪はない。善悪は縁起によって起こるのである。だから善縁に従っていくようにしなければならぬ。

（六）道心がなくても、立派な人に近づき、同じことを、何度も聞いたり見たりするべきである。知っている上にも、聖教を繰り返し見るのがよく、聞くのがよい。

（六）大慧宗杲禅師が、病氣になっても、益々坐禅を勤めて腫物を治した話。病氣でない者が坐禅を手ぬくしてはいけない。病氣は心のもちようで変わることもある。

（六）他人からそしられ、恨みを受けても取り合わず、徹底して自分の道（仏道）をやり抜こうとする者は道を得ることができる。

（六）切羽詰まった気持ちで修行すること。また、選り好みをする心を捨て去れば、直ちに道は得られる。ただ仏法のために仏法を行じること。

（六）何事にも破壊されることのない堅固な法身を持つべきこと。

（六）寺院の経営のことなどには全て関わらないで唯だ坐禅するべきである。行いが堅実な人はおのずと周りに重んじられ、才能のある人は自ずから尊敬される。また、道を学ぶ者が古人の語・公案・古則を見るときは、その深い意味を見落とさないように、よくよく読み取らねばならぬ。

（六）「百尺竿頭進一步」。出家とは、吾我や名利を離れ、頭燃をはらうように修行につとめるべきである。身心を仏法に投げ捨てて、悟道や得法すら望むことなく、ひたすら修行することが大切である。

（六）衣服・食料を前もって配慮してはいけない。時に応じ、道理にかなうように、はからうこと。

（六）智慧や仏の教えを持っているからといって、おごり高ぶってはいけないし、相手の間違いを言ってはいけない。

（六）「学道の最要は坐禅是れ第一なり」。悟りの道を学ぶ者は、ひたすら坐禅し、他のことには関わってはいけない。話頭でもって悟りを開いた人もあるけれども、それは坐禅の功德によるのである。